

義理と人情

「この学校のいいところはね、誰かが困っているときに、みんなが『どうした、どうした?』って、集まって来てくれるところなんだよ。」

教員になって三校目、新たな学校で、また一から始めるという緊張感に包まれているとき、同じ学年を組んだ先輩の先生が、そう声を掛けてくださった。

そのことを実感する機会はすぐに訪れた。生徒会担当になり、ボランティア活動で生徒を動かさなければならないのに、まず地区の様子がよく分からない。地図を前に、「うーん」とうなっている私の周りに、あっという間に人垣ができた。「公民館はこの場所で、〇〇の隣だよ。」「生徒、何人位連れて行く?」などと、いろいろなアドバイスが飛び交う。『皆さん、自分の仕事で机の上が山積みなのに……』と心がほんのり温かくなった。

「ありがとうございました。」と言って、ふと顔を上げると、前出の先輩の先生と目が合った。「ね、そうですね。みんな、自分のことは二の次にして集まってくれるんだよ。こんな仲のいい、協力し合っている私たちのこと、生徒もちゃんと見てると思う。」

私は、赴任したばかりのその学校が大好きになった。そして誰かが「うーん」と言っていたり、困った顔をしていたりするときは、「どうしたの?」と進んで声を掛けるようになった。

私が尊敬するその先輩の好きな言葉は、「義理と人情」である。昔の時代劇のテーマみたいだが、児童生徒にも教職員にも温かい学校にするためには、そういう気持ちが大事なのだと思う。受けた義理を忘れず、「お互い様」の気持ちをもって、人情味あふれる行動をとっていくことで、居心地のいい学校が築かれていくのだと思っている。

今日も、お困りの表情が私の視界に入る。さーて、私の出番だ! 「どうしたの?」